

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	久保美奈
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 社会正義志向のインクルーシブ社会科カリキュラムの構築 —高等学校公民科でのアクション・リサーチを通して—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主査 (Name of the Committee Chair)	准教授	川口	広美
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	川合	紀宗
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	草原	和博
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	永田	忠道
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	森田	愛子
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、批判的に障害問題を捉え、その解消をめざすインクルーシブ社会科のカリキュラム構成原理を明らかにすることを目的としたものであり、以下の2点の課題からなる。</p> <p>(1) 先行研究の体系的な整理を踏まえ、包摂的な社会形成をめざすインクルーシブ社会科の概念整理とカリキュラム構成原理の理論的検討</p> <p>(2) 高等学校におけるアクション・リサーチを通じ、インクルーシブ社会科の具体的な実践のあり方を示しながら、より文脈に根ざしたカリキュラム構成原理の実践的検討</p> <p>論文は、この2点の課題に対応した2部構成で、序章終章を含めて全部で12の章から構成されている。</p> <p>第1章は、研究の主要概念として「インクルーシブ社会科」という概念を提示した。社会正義教育としての社会及びインクルーシブ教育の現状と課題を示し、その解決策として社会科教育とインクルーシブ教育をつなぐ「インクルーシブ社会科」があると述べた。</p> <p>第2章は、関連する先行研究を踏まえて、社会科がこれまでいかに障害問題の解消に取り組んでいたのか、その特質と課題について、授業目標や内容・方法の視点から明らかにした。</p> <p>第3章は、社会正義志向のインクルーシブ社会科のカリキュラム構成原理の理論的基盤として、障害平等研修のプログラム構成を分析しその特質を抽出した。</p> <p>第4章は、なぜ、アクション・リサーチを行うのか、その目的と、展開する授業のデザイン原則とカリキュラム構成原理を示した。</p> <p>第5章は、前章にて示したカリキュラム構成原理を踏まえ、学校文脈に合わせて作成した現代社会のカリキュラム計画を示した後、データの収集・分析方法について説明した。</p> <p>第6章は、民主的な教室空間づくりをめざす単元を開発し、実践と省察を行った。本単元は、今後のすべての実践に通底する空間づくりについて、学習内容として取り組むことで、生徒自身の主体性と自律性を重視し、人権を尊重する価値を学ぶために設定された。</p> <p>第7章は、障害を社会的抑圧としてみとめるための視点である「障害の社会モデル」の獲得をめざす単元を開発し、実際に省察を行った。単元では、個人に原因を求められやすい抑圧問題を特に取り上げ、個人の問題ではなく、社会問題として分析できる力を身につけられるように設定された。なお、題材としては「平等権」を取り上げ、一律に同じ対応をすることが平等につながらないとし、存在の平等という概念の理解も同時に行っている。</p>			

第8章は、変革に向けた行動づくりをめざす単元を開発し、実践と省察を行った。単元では、学習者の抵抗が現れやすいと考えられる障害者運動の事例を取り上げ、運動の当事者たちに共感を行いながら、社会正義志向のより幅広い問題解決の方法を考える力を身につけられるように設定された。なお、題材としては「政治参加」を取り上げ、より良い政治参加の在り方について考察を深める内容になっている。

第9章は、当事者として社会正義問題と向き合うことをめざす単元を開発し、実践と省察を行った。本単元は、生徒自身が持っている当事者性のある社会正義問題を発見したり、他者の問題に生徒自身がどのように関与したりしているかを振り返るように設定した内容になっている。

第10章では、本アクション・リサーチの実践の成果として、B高校における「インクルーシブ社会科」のカリキュラム構成原理を示した。具体的には、全単元を通じて、生徒が安心して過ごす環境を作る空間づくりと、批判的な視点から問題解決を行う学習づくりを行うことがある。加えて、主に障害をテーマにした単元を実施し、他者の問題として障害問題を認識する単元から、自分が当事者として向かい合う問題へと展開する単元へと移行することで、社会正義志向のインクルーシブ社会科のカリキュラムが実施できることを明らかにした。

終章では、本研究の成果と今後の展望を述べた。

本論文は、次の4点で高く評価できる。

1. 「障害」を軸に、従来の社会科教育の課題を明確にした。本論文では、「障害の個人モデル」「障害の社会モデル」を分析視点とし、障害問題に関する教科書・実践と研究を取り上げ、その目標・内容・方法を検討した。その結果、社会科は多様な人々を共生する教育を促しながらも、現在の在り方では、「障害者」とされる人々をめぐる社会構造やイメージを継続させてしまう機能を有した危険性があることを明確にした。
2. 社会正義志向のインクルーシブ社会科実践を実現するための理論的基盤を導出した。その教科目標から、社会科は社会正義志向であるべきだという指摘は従来からなされていたものの、日本の社会科教育の文脈に根差した形で、どのように展開すべきかが明確になってこなかった。本論文では、障害平等研修の分析を通し、学習目標・内容・方法と共に、教師のあり方についての理論化を図った。
3. 実際の学校の文脈の中で1年間のアクション・リサーチを行い、既存のカリキュラムの中で実施する社会正義志向のインクルーシブ社会科の在り方を学習目標・内容・方法の視点から詳細に示した。そこでは、子どもの反応や教師自身の省察を通じた修正を行い、カリキュラム改善の方法論も同時に提案している。それと共に、当該学校の文脈に合わせたインクルーシブ社会科のカリキュラム構成原理を明らかにした。
4. 研究全体を通じて、社会科教育における開発的・実践的なカリキュラム研究の新たな在り方を示し、その有効性を示した。従来の社会科の実践カリキュラム研究は、短期間で投げ込み的なものが多くあった。これに対し、本研究では理論に基づき年単位の実践に根ざしたカリキュラムを開発しただけではなく、それを実践・検証・改善という方法を通じた批判的検討を行った。開発的・実践的なカリキュラム研究の方法に関する新たな知見を導くことで、本研究での新たな研究方法の有効性を示した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 4月28日

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)